

チェンバロの日！2017

5月13日(土)・14日(日)

チェンバロを愛する人々が大集合するイベント「チェンバロの日！」、今年でなんと6回目！
今回のテーマは、コンテンポラリー！

20世紀初頭、長い眠りから覚めたチェンバロに、再び命が吹き込まれました。
過去の音楽を蘇らせるための様々な研究と共に、新たな楽曲の数々もまた誕生したのです。
そのチェンバロ復興の立役者ともいえるべき、プレイエル社製ランドフスカモデル・チェンバロを用いての
レクチャーコンサートをはじめ、他にもいろいろ、コンテンポラリーが盛りだくさん！

好奇心と探究心をわしづかみにする充実の2日間の内容をご紹介します！

コンサート

コンテンポラリー作品が中心のプログラムによるコンサートを
2日間で3回開催、さらに、ランドフスカモデル・チェンバロ
を用いてのレクチャーコンサートを、両日とも開催します。
欧米だけでなく日本で生まれた楽曲も登場！
お気に入りの作曲家、作品と新たに出会えるかも？ チェンバ
ロという楽器の新しい側面が、鼓膜にチラリ、心にドキリ。

講座

今年は「イタリア古典絵画技法～テンペラ画～」に関する特別
な講座が行われます。日頃あまり馴染みのない、絵画の技法に
ついてのお話、目からウロコがポーロポロ！
チェンバロの響板に描かれている絵、見たことありますよね。
あれこそ実はテンペラ画！その神秘の世界、覗いてみましょう。

ミニチュアチェンバロを作ろう

毎年大人気の「ペーパークラフト」のワークショップです。手
のひらサイズのキュートなチェンバロを簡単に楽しく工作し
ながら、気がつけば楽器の構造や装飾の違いなども学べちゃう
というから摩訶不思議！あなたの心の中だけで鳴り響く、世界
でたったひとつのチェンバロ、作ってみませんか？

クイズ・チェンバーロン！

昨年ゆる〜くデビューした、チェンバロ博士とプレクト・ラム
ちゃんによるクイズ大会。全問正解した方には、博士の称号を
勝手にプレゼント！今年も各日2回ずつ開催しますので、ふる
ってご参加ください。あなたの挑戦を、お待ちしております！

懇親会

初日の夕刻、ふれあいの場として、懇親会を無料で開催します
(入館料は必要です)。今年の料理も、きっとスペシャル！
演奏家や楽器製作者とのおしゃべりもお楽しみください。調理
や温めが不要なものであれば、持ち込みも大歓迎です！

座談会

登場するのは、長きにわたりチェンバロのコンテンポラリー作
品の演奏に力を入れ携わってきた演奏家、楽器に興味を持ち作
品を書き下ろした作曲家、「ヒストリカル・チェンバロ」の新
たな可能性をさらに探求しているパリの大学の現状を経験し
てきた若い演奏家の3人。そこに司会の大塚直哉氏が加わって、
様々な角度から驚きが飛び交う座談会。嗚呼モダン！

フリーコンサート

今年是你の出番です！勉強中の方・愛好家の方、響きの良
い美しいホールで気持ち良く演奏しませんか？チェンバロを
愛する皆様の発表、腕試し、そして交流の場として、ぜひご参
加ください(出演には事前のエントリーが必要です)！

チェンバロ・カフェ／展示販売

1階のレセプションルームでは、憩いの場としてチェンバロ・
カフェを今年も開店します。会員が淹れる美味しい珈琲を片手
に、ホットー息。また、会員が一つ一つ手作りしたチェンバロ
モチーフの小物販売や、今年のテーマに沿った楽譜、CDなど
も盛りだくさん！どうぞ心ゆくまで宝探しをしてくださいね。

チェンバロの日々／ランドフスカ

サロンでは、過去5回の「チェンバロの日！」の懐かしいダイ
ジェスト映像と、チェンバロ復興の旗手を担ったワウダ・ラン
ドフスカ女史の足跡を綴ったDVDを上映します(ランドフス
カモデルのレクチャーコンサート時は除く)。ふかふかのソフ
ァーでくつろぎながら、過ぎ去ったときに想いを馳せて…zzz

それから

会場から一歩出るとそこは、新緑の美しい木々に囲まれた庭園。
疲れてしまったら外へ出て、ゆっくりと深呼吸してくださいね。
五感すべてが満たされる「チェンバロの日！2017」、たくさ
んの新たな出会いと想い出が、あなたを待っています！

🎵 次期会長選挙の結果について

日本チェンバロ協会次期会長選挙において、候補者の推薦を募ったところ、久保田慶一現会長に対する推薦書一通を受領しました。よって、選挙管理規程第3条第5項の規定に基づき、久保田氏を当選者とします。久保田氏は5月13日の総会にて、次期会長に就任します。

🎵 年報発行のお知らせ

日本チェンバロ協会は来る5月に、念願であった『年報』の創刊号を発行します！昨年春に久保田会長を中心とした7名による年報委員会を立ち上げ、会合での様々な意見交換を繰り返しながら編集を進めてまいりました。まもなく最終校正へと入ります。いよいよ実際の形が見えて来た、というところでしょうか。

ここで少しでも内容をご案内しましょう。

- ・巻頭：チェンバロ奏者への特別インタビュー
- ・特集：昨年に引き続き、なんと今年も J.J.フローベルガーの記念イヤー！
昨年の「チェンバロの日！2016」で行われたフローベルガーに関するレクチャーに基づく、3本の論文を掲載。
- ・シリーズ：新刊楽譜や楽書の紹介、留学レポート、海外音楽祭レポート、チェンバロ工房巡り 他

価格は3,000円（予定／アルテスパブリッシング刊）で、書店で販売されることとなりますが、会員には来る5月の「チェンバロの日！2017」等において無料で配布します（新会員区分および会員特典について、本会報最終ページをご確認ください）。委員一同、より良いものをお届けできるよう心血を注いでまいります。どうぞ5月をお楽しみに！

🎵 ホームページ探検隊！

<https://japanharpsichordsociety.jimdo.com>

コチラからひとつ飛び！→



広報では、会員の皆様と歩みを共に出来るよう、定期的に会報やメールマガジン、更に SNS での発信を行っております。そして、そうした情報の基地として、ホームページも充実させるべく日々悪戦苦闘しております…。現段階では、下記の表のような枠組みで、様々な情報を掲載しておりますので、ぶらりと探検してみてください！

最新のお知らせ（トップページ）	まずはこちらをチェック！
日本チェンバロ協会について	協会について、会長ご挨拶、運営委員一覧、会則、総会議事録、会員一覧、選挙管理委員一覧、選挙規定、事務局お問い合わせ先、会長選挙についてお知らせ
入会・退会方法・会費のお支払いについて	入会案内、入会・退会・区分変更のお問い合わせ、ご住所・メールアドレス等変更の連絡先、振込先、賛助金の受付、ご注意ください（年会費未納）
催し物	例会のお知らせ、チェンバロの日！、動画、活動履歴、例会募集要項・お問い合わせ
会報・年報	過去の会報、年報規定、年報編集委員一覧
正会員による演奏会・イベント	演奏会・イベント情報、講習会情報（国内・海外）、演奏会・講習会情報掲載依頼方法
会員専用ページ（要パスワード）	過去の例会や「チェンバロの日！」のレポート・動画等、海外留学事情
古楽関連協会情報	パートナーシップ協定について、協力関係にある各協会の情報・イベント紹介
コラム	協会のつづきやきコラム
事務局からお知らせ	各種ご案内
お問い合わせ	内容別のお問い合わせ先詳細

東日本大震災のあった2011年に発足した当協会も、今年で6年目を迎え、その活動も少しずつ蓄積されてきました。インターネットが盛んな昨今、情報の共有は便利になったものの、イベントに関してはどうしても地域格差を超えることが難しいのが現状です。同じ会員として頭を悩ませており、広報としては、その距離を少しでも縮めることが出来ないか奮闘しております。

新しく入会された方々にも過去の会報を読んでもらえるようにしたり、参加できなかったイベントの動画を掲載したり。できれば、皆様がお住いのそれぞれの地域での活動を発表できる場も作りたいたのですが、どのようにしたらよいのか…。最近では、外部から当協会やチェンバロについての問い合わせも多くなり、対応を進めております。

皆様の日本チェンバロ協会です！その情報の城ともいべきホームページを活用していただくと共に、皆様から忌憚のないアイデアをいただき、更に堅牢で有意義な城郭を築いていけるよう尽力してまいります。今後ともご協力宜しくお願い申し上げます！

第 21 回例会 「フリーコンサート」

2016.10.15 松本記念音楽迎賓館

快晴に恵まれた秋の午後、会場所有のフレンチタイプのチェンバロを使用して、恒例のフリーコンサートが行われました。世の中なかと忙しい時期だったためか参加人数が伸びず、最終的に3名にとどまってしまいました。いささか寂しい会になるのではと心配しましたが、開場してみると客席は多くの聴衆で埋まり、開演への期待感が高まるのを感じました。そして出演者がいずれも、チェンバロに真摯に向き合った素晴らしい演奏を披露され、非常に充実した時間となりました。

曲目は、生誕400年のフローベルガー作品が最も多く取り上げられました。聴衆の中にはチェンバロを初めて聴くという家族連れもおられ、ある意味「渋いプログラム」を小さな子供が最後まで静かに鑑賞してくれたのも大変嬉しい出来事でした。終了後は講師の副嶋恭子氏から、全体講評として「演奏の際の呼吸」をはじめとする様々なアドバイスが為された他、個別講評の時間も設けました。

今後はさらに多くの方々に参加しやすくなる方法を、開催時期を含めて検討していきたいと思います。(鴨川華子)

出演者と演奏曲目は次の通りです(敬称略)。

1. 金澤和子
J.J.フローベルガー：パルティータ 第2番 FbWV602
F.クープラン：第26 オルドゥルより《病み上がり》
2. 飯塚稔
J.P.スウェーリク：ファンタジア SwWV270
3. 嶋本けい子
J.J.フローベルガー：トッカータ ト長調 FbWV107
カンツォン ト短調 FbWV302

“洋館のお屋敷”に入り、スタンドグラスに囲まれたホールに入ると、何か別世界へ入ったような気分になりました。そして、遠くにしえのヨーロッパのバロック音楽の世界に思いをいたす場となりました。出演者が少なく、出演者が招待した聴衆は少なかったのですが、開場してみると思ったより多くの方のご来場をいただきました。松本記念音楽迎賓館のコンサート案内による方も少なからずいらっしゃったのかもしれませんが、アットホームで充実した場に参加できて良かったと思います。(飯塚稔)

今回初めて参加させていただきました。例会係の先生方の細やかなサポートのもと、素晴らしい楽器と響きの良い会場で演奏でき幸せでした。副嶋先生からも的確で細やかな講評を賜り大変勉強になりました。中でも、「演奏を聴いている人に良い曲とと思っていただけるように…」という言葉は、深く心に残りました。学ぶべきことはたくさんございますが、この言葉を胸に精進してまいりたいと思います。このような貴重な機会を与えてくださり、ありがとうございました。(嶋本けい子)



第 22 回例会 「チェンバロの名器を訪ねて ～ヨーロッパの楽器博物館・コレクションをめぐる旅～」

2016.11.10 札幌市教育文化会館

講師は渡邊順生氏。豊富な画像と音源を用いつつ、国と時代別に多くの楽器が紹介され、初めての方も飽きることなく楽しむことが出来ました。初めての北海道での開催、また、例年より早い大雪や風邪の流行等もあり、参加者数は限られましたが、ご参加くださった皆様からは大変好評をいただきました。インターネットで可能になったことは多いとはいえ、人に届く情報というのは、やはり人を通してもたらされるのだと改めて思いました。ありがとうございました。(森洋子)



ヨーロッパ各国の特色ある楽器を、実際の音のイメージも含めて知ることができ、非常に有意義な3時間でした。国や時代により異なる様々な美術的装飾について、絵柄の描かれ方や使用されている素材などの説明をもとに、写真以上により具体的にその楽器をイメージすることができる内容でした。舞台上の歌手に通奏低音が聴こえやすい形をしたオペラ用のものや、鍵盤の段により調性が異なる移調用のもの、折りたたんで持ち運べる旅行用のものなど、用途によって様々な工夫がされた楽器についても興味深かったです。(雪田理菜子)

第 23 回例会 「リュート・チェンバロ（ラウテンクラヴィア）奏者 速成講座」

2016.11.20 桐朋学園大学 調布キャンパス

13 時より渡邊順生氏のレクチャーコンサート、14 時より受講者による体験（公開レッスン）という形式で開かれ、会員 6 名、一般 3 名、同大学から 5 名、計 14 名の受講者がありました。各々の規定時間をしばしば超えてしまうという、受講者にとっては嬉しいハプニングも多々ありました。さらに会の最後、参加者からの「模範演奏を！」という突然のリクエストにも渡邊氏は快く応じ、J.J.フローベルガー《ラメント》の響きが残る中、お開きとなりました。

長時間の例会となりましたが、皆さんの熱心な眼差しの中、時折渡邊氏がユーモアを交える場面もあり、大変充実したひと時として、希少かつ貴重なリュート・チェンバロをご堪能いただきました。

末筆ながら、桐朋学園大学には会場提供など共催校としてご便宜いただきましたこと、心より感謝申し上げます。（有橋淑和）

気持ちよい秋晴れの中、真新しくモダンな校舎 2 階の教室には、受講・聴講あわせて 35 人程が集まり、教室の正面には講師・渡邊順生氏の所有される、鮮やかな赤色をした 2000 年 Keith Hill 製作のリュート・チェンバロと、その横にクラヴィコードが置かれていました。リュート・チェンバロの外見は二段鍵盤のチェンバロと変わらないのですが、どんな音がするのか、期待が高まります。

前半のレクチャーコンサートでは、18 世紀ドイツでリュート・チェンバロの製作が始まり、J.S.バッハがケーテン時代に自分で設計したリュート・チェンバロをヒルデブラントという製作者に依頼して製作、遺産目録にも含まれている等、大変関わりが深かったことや、《組曲 短調》BWV996 には「リュート・チェンバロの為の」と表記された筆写譜もあり、他のリュート作品の中にもこの楽器の為の曲があるかもしれない、などという話がありました。

続いて《チェロ組曲 第 5 番》の編曲である《リュートの為の組曲 短調》BWV995（楽譜もお土産として配布されました）より、プレリュード、アルマンド、クラント、ガヴォット、サラバンドの楽章の演奏がありました。また演奏の手引きとして、単旋律の中にポリフォニーを見出した演奏をするなど、少ない音を語ること、和音は例えば無伴奏ヴァイオリン組曲等の重音の弾き方を参考にしてみる等、弦楽器の奏法との接点の話がありました。

演奏中はガット弦のやわらかい音色を堪能し、また最前列に座っていた私が響板を覗くと、摩擦が大きい為か、弦をツメが弾く振動が水面の波紋のようにはっきりと見えました。

休憩をはさんで後半は体験レッスンです。受講者は学生から一般まで 14 名。課題曲はリュート作品、リュート様式によるチェンバロ作品、バッハによるリュート・チェンバロの為の作品ということで、受講曲は課題曲例の中から、ダウランドのラクリメ、フレスコバルディの舞曲、フローベルガーやルイ・クーブランの組曲、トンポー、パヴァーヌ、バッハのリュート作品など。

同じ課題曲を選択した方も、受講の時は違う楽章を指定されたので、重複することなく、たくさんの曲を聴講できました。1 人 15 分という短い持ち時間でしたが、レッスン内容は受講者によって、楽譜の校訂による音の違い、テンポについて、曲の構成や表現の仕方など様々でした。

リュート・チェンバロの奏法として、義務的慣習的に拍に従うのではなく、響きを聞き届けてから次に進む、というアドバイスは何度かありました。確かにダンパーがないので、注意深く耳を使わないと違う和音が混ざり合いすぎて聞こえることもあります。実際に自分で楽器を弾いた感想ですが、響きが大きく、自然なレガートが作りやすい。それから、チェンバロでは実は少し「嫌だな…」とってしまう同音の連打による表現も、リュート奏者になったつもりで試してみたくまりました。

5 時間に渡る講座の最後は受講者のリクエストに応える形で、講師の渡邊先生がフローベルガーの組曲 30 番より《嘆き～憂鬱を晴らす為にロンドンで作曲》を弾かれたのですが、一同聴き入って、最後の音が消えても会場がシーンと静まりかえっていたのが印象的でした。（林則子）



第 24 回例会 「出版記念『古楽でめぐるヨーロッパの古都』—音の背景を探る旅—」

2017.2.3 国立オリンピック記念青少年総合センター

日本チェンバロ協会は例会の開催を活動の大事な柱とし、年に数回、公開レッスンやレクチャーを催している。その大半が実際の演奏に直接関わる内容をもつのは当然としても、チェンバロ音楽を文化や歴史の流れの中で捉えることもまた重要であり、例会がその 1 つの役割を担っていきたいと願っている。このたび、渡邊温子さんを講師に迎えた講座は、その方針にかなう催しであった。

渡邊さんは、古楽の視点から音楽と街のつながりを描いた『古楽でめぐるヨーロッパの古都』の著者である。この本は、昨夏アルテスパブリッシングが創設した、古楽に関する新シリーズ「Books〈ウト〉」の最初の 1 冊として刊行された。

レクチャーは、音楽史の本にも載っていないような細部を語りながらも、視野は広く、話題は政治、文学、美術におよんだ。選び抜かれた CD や映像は、眼も耳も満足させ、参加者の暖かな拍手とともに例会を終えた。（坂由理）

チェンバロは門外漢のサクバット奏者である私が、今回の渡邊温子氏の新著の講演に興味を持ったのは、金管でもよく演奏される「スザート」と、今興味を持っている「キプロス」が載っていたからです。いざ受講してみると、他の面でも数々の驚きがあり、充実した会で、チェンバロに対する興味が沸々と湧き上がって来ました！

今回取り上げられたアントウェルペン（アントワープ）が、16世紀半ばに経済、文化の中心地であり、ギルドが発達していた事。そのころ肉屋のギルドハウスとして使われていた建物内に、現在は、フランドルのチェンバロ製作者ルッカー一族の現存楽器を管理する協会が入っている事。

また、チェンバロの工法の違いの説明もあり、17世紀のイタリアン（グリマルディ）、ルッカーの一段鍵盤（ピンピン明るい音）、2段鍵盤（シャラシャラ華やか）、ヴァージナル（柔らかい）、18世紀ドゥルケン一段鍵盤（深い音）などを聴き比べる事が出来、大きな収穫でした。

スザートの人物像に関しては、16世紀半ば、書籍の印刷を応用した活版印刷を用いた《舞曲集》などの賑やかで単純な音楽の楽譜を、大きな行事（王様や金羊毛騎士団入城など）に合わせたタイミングでたくさん刷って売ろうとした事、北ヨーロッパで初めてイタリア語のマドリガーレを出版した事など、認識を新たにしました。

ニコシアのあるキプロス島は、12世紀、十字軍英リチャードI世獅子心王が魅せられた地で、キプロス島にあるパフォスの海岸がポッティチェリ「ヴィーナス誕生」の背景だったという説もあるそうです。また、シェイクスピアが戯曲『オテロ』を、ヴェネツィア総督がキプロス滞在中に起こった出来事として描くなど、キプロスは皆が憧れる地だったようです。そして、その音楽がトリノ図書館に『トリノJ.II.9写本』として残されています。

14世紀、リュジニャン家支配のキプロス黄金期、ピエールI世と共にパリを訪れたキプロスの音楽家達は、相当優秀であったようです。その時、つまりアルス・ノヴァの時代に、マジョーの音楽に触れて影響を受け、王ジャンヌス・リュジニャンの



所へシャルロット・ド・ブルボンがお興入れした際、カンブレ（デュファイがいた地）で活躍していたジレ・ヴリュやジャン・アネルが随行して来て、アルス・スプティリオル様式の写本がキプロスで製作されました。そしてジャンヌスとシャルロットの娘、王女アンがサヴォワ公爵ルイと結婚する際、嫁入り道具の一つとしてこの写本がトリノに渡り保管されていたようです。

当時のイタリアにおいては時代遅れの音楽だったせいか、演奏されなかったようですが、1.単声ミサ、2.多声ミサ、3.モテット（ラテン語とフランス語）41曲、4.バラード102曲、5.ヴィルレー21曲ロンド43曲の5巻から成る完全な写本で、作者不詳ながら中世音楽最後の時代の煌きを見せる神秘的な音楽に、今、私は魅せられ中なのです！！

渡邊氏の新著では他に、修道院のザンクト・ガレン、ハンザ都市リューベック、大航海の拠点セビーリャとメキシコのプエブラ、ヴァイオリンのクレモナ、ドイツではツェルプスト、マンハイム、宮廷音楽の華やかなヴェルサイユ、貿易の街ヴェネツィアが取り上げられています。写真も多く、古楽が聴こえて来ると、面白くわかりやすい語り口で、是非一読を薦めさせていただきます！（宮下宣子）

🍷 これからの例会

例会係：cembalo_events@yahoo.co.jp

- ・7月2日（日） 第25回例会 「20世紀前半のチェンバロ復興をSP音源によって探る（仮題）」
講師：梅岡俊彦氏（調律師） 於：国立オリンピック記念青少年総合センター（東京）
- ・8月5日（土） 第26回例会 「リュートのレパートリーから見た鍵盤音楽の解釈（仮題）」
講師：坂本龍右氏（リュート奏者） 於：3F音楽室（東京）
- ・8月6日（日） 第27回例会 第26回例会と同内容 於：川井博之チェンバロハウス（大阪）

詳細は協会ホームページ等にて随時お知らせします。

🍷 例会の企画案を募集中！

例会の企画を随時公募しております。

チェンバロや、チェンバロが使われていた時代の音楽について、どのような方向からアプローチしたいかは、きっと人それぞれ。各々がそのアイデアを持ち寄れば、より広がりを持ったイベントを開催できるのでは…そのような思いで公募を始めました。皆様の手で、ご自分の学びたい方法で学べる場を作ってみませんか？

会員／具体的な企画（開催時期・内容・実施者等の予定が明確なもの）を募集 サポーター／企画のアイデアを募集

詳しい募集要項は、協会ホームページの「催し物」→「例会募集要項・お問い合わせ」をご参照ください。素敵なアイデアを、お待ちしております！

古楽研究会（通称オリゴ）の母体は、1973年にJMLセミナーの一環として発足した、鍋島元子のチェンバロ教室です。1974年に独立、名前を古楽研究会 Origo et Practica として、背景文化と演奏の関わりを学ぶレッスン形態をとっていました。初期の名簿には、楽器製作者（柴田雄康氏等）や、他の楽器奏者（上杉紅蓮氏、福沢宏氏、田中潤一氏等）の名前も見られます。

チェンバロソロクラスを中心に、通奏低音奏法、室内楽および他のバロック楽器のクラスを設置した常設研究会として、鈴木雅明、綿谷優子、武久源造、中野振一郎、曾根麻矢子の各氏をはじめ多くの古楽の専門家を育成してきました。チェンバロおよびバロック音楽理解者のすそ野拡大のため、古楽の専門的な勉強とは何かを公開、啓蒙し、愛好家にも門戸を開くという会としてもユニークです。

初めは鍋島の自宅開放で行っていましたが、その後 1976-78年：新宿、1978-90年：市ヶ谷、1990-2002年4月：千早町、2002年から現在まで板橋区中丸町、と独立して、出入り自由の教室設備を持ち活動を行なっています。1999年11月に鍋島が死去した後も、会員が遺志を引き継いで自主運営をし、2005年には演奏スペースとして Space1F を開設。



1997年4月 鍋島元子リサイタル（於：日本工業倶楽部）

しかしながら近年は、大学に古楽科ができ、そろそろその役割を終えた事、会員みずからの運営も厳しくなってきた事から、一旦今年6月末をもって閉会することを決定しました。今後は別の形で古楽界に貢献していく予定となっています。

日本チェンバロ協会会員の皆様に提供していました特典もひとつ減ってしまうこと、申し訳なく思っています。

オリゴの四季

古楽研究会 楽器担当 加屋野木山

人は、咲き誇る花を愛でては胸をときめかせ、散りゆく花を眺めて憂いをおぼえます。しかし、植物からすれば、種を残すことこそが目的であり、開花はイトナミのひとつでしかありません。“存続”という大きな使命の為に繰り返されてゆく、ひとつひとつのかけがえの無いイトナミ。

主観と客観の間は、なんという言葉になるのでしょうか。私がオリゴを眺める視点は、ちょうどそのような中間的な立ち位置でした。「チェンバロを中心に、バロック音楽の生まれた社会的・精神的背景や源（オリゴ）をふまえ、これを演奏（プラクティカ）に活かす」というモットーの元に集まっている方々を、傍観しているだけの楽器係でした。



2016年3月 最後の〈オリゴの春〉（加久間朋子氏）

創設された鍋島先生が1999年に亡くなられて、オリゴの行方はどのようになってしまうのか、私は少し不安のまじった好奇心で眺めていました。しかし、それは杞憂に終わり、愛弟子であった加久間さんが鍋島先生の遺志を引き継ぎ、本拠地を板橋に移動して新しいオリゴを創り上げて現在に至りました。

傍観者の文章では平べったいだけですが、しかし加久間さんのその決意には、尋常でない決断が必要だったと想像できます。カリスマ的な鍋島先生の存在自体がオリゴの推進力になっていただけに、それを引き継ぐ大役を担うためには、よほどの勇気が必要だったことでしょう。古楽界も開拓が進み、音大でもチェンバロが学べる豊かな土壌が整いつつある時代でした。

「楽器や場所は提供するので、日本の古楽振興の為に役立てるよう、加久間中心にオリゴを盛り立てるように」といった内容の言葉が、鍋島先生の遺書の中にあっただろうです。10台以上の鍵盤楽器と共に、鍋島先生の遺志を、任意団体という組織に束ねて、加久間さんはシカと引き継ぎ、オリゴを存続させる為に尽力されました。

そして今、我々は日本チェンバロ協会という新しい組織で、このように出会っています。加久間さんは、鍋島先生の遺志を、更に時代に即した規模と質に合わせ、この協会の立ち上げにも尽力して下さいました。チェンバロ奏者の横の繋がりや、情報の共有、若手の育成、全国区でのチェンバロの普及などを託した協会へ、その重心を移したのです。

まだ古楽という花が珍しかった頃、咲き誇ったオリゴは、この夏に散ってゆきます。しかしそれは憂うことではなく、このような新しい協会の全ての会員が共有できる「種」を残してくれました。傍観者でしかない私は、オリゴに携わった全ての方々に、心からの感謝とねぎらいを贈りたいのです。

100年後も、この極東日本で、チェンバロを盛んに響かせる為に…。今度は私たちが咲き誇り、種を繋いでいく番です。広く深く根をはり、高くそびえる樹木になる為に、この協会を有意義に活用し、オリゴをプラクティカしていけますように。

鍋島先生と古楽研究会オリゴ・エ・プラクティカのこと

バッハ・コレギウム・ジャパン
音楽監督 鈴木雅明

鍋島元子先生が主宰されていた古楽研究会オリゴ・エ・プラクティカが、今年で閉会すると聞いて、寂しい限りです。が、鍋島先生が亡くなられて、はや17年と聞くと、今まで先生の遺志を継いで運営されてきた方々に、本当にお疲れさま、ありがとうございました、と申し上げる以外にありません。

鍋島元子先生の思い出を書くのは、正直なところ、とてもつらいものがあります。というのは、先生ご自身が、いつも高い理想を求めて克己され、それでいて、世の中の凡庸な現実を身をあわせておられる姿が、時として、あまりにも痛ましかったからです。完全主義の宿命として、どうしても自他の不完全さに対する根本的な怒りが内在するので、それが先生の克己心をさらに駆り立て、その人生も演奏も、ますます研ぎ澄まされたものになっていく、という、師のレオンハルトにも似て、凡人には想像し得ない次元で生きておられたように思います。

先生から学んだことや思い出のひとつひとつを書き始めると、永久に終わることがありません。しかし、ただひとつを挙げるならば、ブルージュのコンクールでのことを思い出さずにはいられません。

もう40年近く前、私が学生時代、初めてチェンバロソロでブルージュのコンクールを受けたとき、第一次予選で見事に落選してしまいました。落胆しつつ会場の外で鍋島先生に出会うと、先生は、「こんな結果はありえない」とつぶやくや、ちょうど外に出てきた審査員に詰め寄って、すさまじい速さのドイツ語で抗議されたのです。私はその剣幕にただ呆然としていましたが、もちろんそんな抗議が聞き入れられるわけもなく、先生は俄に踵を返すと、私の手をぐいと引っ張って、「ついていらっしゃい」と小さなレストランに連れて行かれました。興奮のあまり、席に着くやいなや、お店の人が注いでくれた水のグラスを床にぶちまけてしまわれ、先生は、ごめんなさい、ごめんなさいと言いながらも、なお怒りがおさまらないようでした。が、やがて私に向き直ると、毅然とこう言われたのです。「雅明君、よく聞きなさい。コンクールに落ちたからと言って、あなたの資質の、たとえほんのわずかでさえ、決して欠けるわけではないのよ。このことはよく覚えておきなさい！」考えてみると、本当にその通りです。他人にどのように評価されようと、自分の持っているものが減るわけでも、また増えるわけでもない。今思えば、これは鍋島先生が、他人に目を向けるのではなく、ご自分の内面と厳しく対峙して来られたからこそ、進り出た言葉だったに違いありません。

このことは、実はもうひとつの思い出に重なります。まだオランダに留学する前、先生が私に小さな文庫本を差し出して、「あなたにこれをあげますから、よく読んでおきなさい」と言われました。チェンバロの本かと思いきや、それはスペインの哲学者オルテガの「大衆の反逆」でした。「大衆」と「貴族」について書くオルテガの本は有名ですが、鍋島先生が、本当に貴族の（と言って良いかどうか分かりませんが）ご出身であるので、私は「あなたのような庶民には、このような本でも読んで貴族の気持ちを理解しなさい」と言うことかと、一瞬たじろぎました。しかし、全くこれは私の誤解であったのです。

オルテガの定義する貴族というのは、決して家柄や出自のことではありません。彼曰く、「貴族とは、努力する『生』の同義語であって、常に自分に打ち克ち、みずから課した義務と要請の世界に、現実を乗り越えて入っていく用意のある『生』である。」

自らに義務を課して、克己する「生」。これほどに、鍋島先生を正しく言い表した表現があるのでしょうか。鍋島先生は、ご自分の演奏にも、また教育にも、高い理想を堅持してどこにも妥協なく打ち込まれたと思います。

私が初めて古楽研究会の教室にこわごわ足を踏み入れたとき、先生が話される作曲家の名前らしき固有名詞も時折混ざるドイツ語やオランダ語の単語も何もわからず、先生の日本語がほとんど外国語のように聞こえました。しかし何度かかのレッスンで、先生が求めておられた小さなアーティキュレーションやフレージング、またチェンバロにはおおよそ存在しないと思っていた強弱が、突然堰を切ったように耳に流れ込んできて、ああ、こういうことか、とわかったのです。

当時は、どこの音楽大学にも、バロック音楽の専攻はなく、この教室で行われていたことは、全く驚くべき時代を先取りするような真摯な教育であったと思います。それは、もちろん鍋島先生がオランダで学ばれたことでもあったでしょうが、本当に今にして理解できることは、先生がオランダから持ち帰られたのは、決してバロックのパフォーマンス・プラクティスについての情報ではなく、どのように音楽家としての自分に対峙するか、そして、自らに課した課題と使命をどのように全うするか、という人生を賭けた問いであったと思います。思えば、先生のオランダへの留学が既に背水の陣であったので、先生の学びが自ずから妥協を許さない、また無駄な時間を許さない緊張感の中であったことでしょう。だからこそ、オリゴの教室にもそのような緊迫感が漲っていたに違いありません。



1997年 鍋島元子 還暦記念パーティーにて

今、この古楽研究会が40年の月日を経てその使命を終るのは、ある意味では自然なことかもしれません。しかしその教室で伝えられてきた鍋島先生の音楽への思いは、まさしく先生の師であるレオンハルトがもっていた緊迫感とエネルギーであり、もう今は亡きブリュッヘンやアルノクールなどの古楽界第1世代がこの世に突きつけた、刃（やいば）の如く、鋭く熱い情熱であったのです。今や、鍋島元子先生も、そしてレオンハルトやアルノクールをも知らない世代が音楽家として育ちつつあることを思うと、古楽研究会オリゴ・エ・プラクティカの組織としての使命が終わったとしても、その思いを伝えるべき私たちの世代の使命が、決して終わったわけではないことを肝に銘じたいと思います。

鍋島元子先生、そして古楽研究会オリゴ・エ・プラクティカの皆さん。
本当に長い間、ありがとうございました。

4月1日より会員区分が変わります

これまで協会員は「正会員・一般会員・法人会員」で構成しておりましたが、2017年4月1日より「**会員・サポーター・法人会員**」となります。チェンバロを愛する方々、チェンバロの音が好きな方々、どなたでも「**会員**」としてご参加いただけます。

● 新会員区分

- ① **会員**：チェンバロと関わりを持ち、協会の趣旨に賛同する方／年会費 6000円（学生の身分を持つ方は3000円）
- ② **サポーター**：会員以外の個人会員／年会費 3000円
- ③ **法人・団体会員**：協会の趣旨に賛同する法人または団体／年会費 10000円

【 特典 】

「会員」「サポーター」共通	「会員」のみ
<ul style="list-style-type: none">・様々な講習会やイベントへの会員割引での参加・会報、メールマガジンほか各種情報の送付・特定の店舗の会員割引での利用・協会ホームページの＜会員専用ページ＞の閲覧	<ul style="list-style-type: none">・総会における議決権・会長選挙の選挙権・年報の無料購読・年報への投稿・自らが関わる演奏会、レクチャー等の告知・自らが関わる演奏会、レクチャー等について協会の後援を得ること・協会運営への参画

● 区分の変更方法

- ・ **正会員→会員** または **一般会員→サポーター**：変更手続きは必要ありません。
- ・ **正会員→サポーター** または **一般会員→会員**：2017年度の会費を支払う時まで、会員番号・お名前・区分変更の内容を、メールまたは電話（※）で、事務局へお知らせください。

※ 不在の場合は、留守番電話にお名前とご用件をお残してください。確認次第、折り返しご連絡いたします。

詳しくは協会ホームページをご覧になるか、事務局までお尋ねください。

更新手続きのご案内

平素は日本チェンバロ協会へのご理解とご協力を賜り、誠にありがとうございます。

お手数ですが、2017年度（4月1日から翌3月31日）年会費を下記口座までお振込ください。

2016年度分を未納の方は、あわせてお納めください。ご入金が確認でき次第、新しいパスワード入りの会員証を送付致します。

【年会費】 会員：6000円（学生：3000円） サポーター：3000円 法人・団体会員：10000円

* 5月13、14日開催「チェンバロの日！2017」の会場でも、更新手続きを致します。どうぞご利用ください。

* 会員証記載の協会ホームページ用パスワードは、「チェンバロの日！」の翌日（5月15日）から更新・適用されます。

また、今後の催し物やホームページの充実など、より良い活動の実現のために、随時、賛助金を受け付けております。

お振込の際はその旨お知らせくださるようお願い致します。

【賛助金】 会員・学生会員・サポーター：一口3000円より 法人・団体会員：一口10000円より

〈お振込先〉 ゆうちょ銀行 名義：日本チェンバロ協会 店名00八（ゼロゼロハチ）
店番：008 預金種目：普通預金 口座番号：0724661

事務局より

事務局：japan.harpsichord.society.jp@gmail.com

- ・メールアドレスや住所変更のご連絡、年会費のお支払い状況に関するお問い合わせは、事務局までお願い致します。
- ・最新のメールマガジン（第59号）を受信できていらっしゃらない方は、ご連絡ください。
- ・協会の運営に携わってくださる方を随時募集しております。詳しくはお問い合わせください。



日本チェンバロ協会
Japan Harpsichord Society

会報第8号 2017年4月1日発行 発行人：久保田慶一
編集：加屋野木山、高橋ナツコ、山縣万里、山本庸子

日本チェンバロ協会事務局

住所：〒170-0002 東京都豊島区巢鴨1丁目44-4 1階

電話：080-9661-8196（火曜日 10時～17時に対応）

メール：japan.harpsichord.society@gmail.com

ホームページ：http://japanharpsichordsociety.jimdo.com